■『稲穂』第11号の発刊に当って

有効な「一年生の進路研修旅行」

西村清一（高7回、在京飯田高校同窓会会長）

在京飯田高校同窓会会長に就任して、早いもので三年目になりました。役員の皆さんはじめ同窓会会員各位のご支援ご協力により、恙なく同窓会が運営出来ておりますこと、心より感謝申し上げます。

昨年より本部同窓会の副会長に就任し、入学式、卒業式、職員の歓送迎会、在京で云う評議員会様式の会・会長副会長会、役員会等、年に六回以上も飯田に通っております。行き帰りの道中、故郷の四季の移り変わりを直接肌に感じ、心が和みます。

平成二十六年度の入学生は二百八十三名。今年は男子生徒の方が女子生徒より二十数名多かったようです。元々は男子校だった母校も、時代と共に教育制度等が変わり、男女共学となり、女性入学者が多くなってきました。そしてここ二、三年前には男子より女子生徒の方が多いという状況を呈していました。

同窓会の社会貢献の一環として、学校が始めた「一年生の進路研修旅行」が、今年で四年目になりました。平成二十三年度では、一年生二百八十名が七班に分かれ、長野コース（信州大学、信濃毎日新聞）、京都コース（京都大学、福寿園ＣＨＡ研究センター）、東京Ａコース（早稲田大学、本田技研）、東京Ｂコース（明治大学、裁判の傍聴）、名古屋Ａコース（日本福祉大学、中部日本放送）、中部Ｂコース（名古屋工業大学）、中部Ｃコース（名古屋大学、トヨタ自動車）に分散して訪問。各所で飯田高校卒業の教授、准

教授、部長、課長などＯＢの方々のご協力を得て、大学や企業の案内、講演・講習会、質疑応答など様々な体験を致しました。

先輩の皆様の教えは、今の内に学習習慣を確立すること、学問の基礎の勉強が大事、目標や夢は早めに決めておく、自分が何のために勉強しているか、将来どうしたいかなど考えを明確にしておく、好きなことに挑戦する熱い気持ちを持つこと、科学技術の研究者が一人でも多く出てきてほしい――などというものでした。

裁判の傍聴も初体験でかなり緊張したそうです。大学や企業での話を聴いて、各生徒達にとって、この旅行は大変な刺激になっており、熱心に何かを学び取っていこうという意欲に燃え、自分達の進路を考える上で大きなヒントが得られたようです。今まではあまりにも視野が狭く、〈井の中の蛙〉であった、これからはもうひと踏ん張りが必要だ、と感じた生徒も多かったようです。この企画が続いていけば、生徒の自覚も学業も向上し、必ずや進学率も良くなっていくと確信致しております。

少子高齢化が進み、飯田高校も昨年は一学級減となり、一学年七学級となりました。最近、世間一般に広まりつつある中高一貫教育問題は、故郷飯田地区でも始まってくるのではないでしょうか。社会の都合で制度を変えられることは大変だと思いますが、故郷の生徒たちがそれらに打ち勝って頑張っていってほしいと強く望んでいます。

●にしむら・せいいち　伊賀良出身、昭和30年卒業（高7回）、日本歯科大学卒業。医学博士。趣味は彫金。
診療所：東京都江戸川区、自宅：千葉県市川市。